

主 題：キリストのすばらしさを知った人生 3  
 聖書箇所：ピリピ人への手紙 3章17節－4章1節

これまで私たちは2回に亘って「キリストのすばらしさを知った人生」について考えて来ました。これまでのことをどこまで覚えておられるでしょうか？かつて、キリストのすばらしさを知る以前のパウロは、自分の持って生まれたもの、自分の特権、行ないによる義によって救いを得ようとしていました。しかし、その彼がキリストを知ることのすばらしさを味わい、キリストを知ることによって完全に変えられたのです。キリストがいったい何をされたのか？キリストがいったいだれなのか？パウロがそのことを個人的に知ったとき、彼の人生は変えられ新しい目標を持った人生をスタートすることになったのです。その新しい人生は、キリストをよりよく知りたい、キリストにより似た者になりたいと、その思いをもって歩むものでした。パウロもキリストの栄冠を得るために、日々信仰のレースを走り続けていました。

そして、パウロは最後の最後まで、自分の前に置かれたその信仰のレースを走り切ったのです。Ⅱテモテ4：6－7で「:6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」と言っています。パウロという人物を見たときに、彼はどんな状況にあっても、どんな困難にあっても、どのような苦しみに遭ったとしても忠実に最後までレースを走り切ったということを知ります。そして、同じことが私たちひとり一人にも言われているということを見たのです。私たちが本当にキリストを知ったのであれば、必ず、私たちの人生は変わると言います。そして、変わるだけでなく、私たちがパウロのようにキリストをより知りたい、日々より聖さを求めてよりキリストに似た者になっていきたいという思いが与えられるということを見たのです。そのような責任を私たち一人一人は負っているのだということを見てきた訳です。

さて、今日はこのシリーズの最後、3回目になりますが、その内容を見る前に、皆さんひとり一人に覚えて欲しいことがあります。それはこれから見ようとしているピリピ3：17－4：1には、「二つの異なる終着駅にたどり着く人の様子」が記されているということです。具体的に言えば、あるグループは今滅びへと向かっている、そして、別のグループは今救いへ向かっているということです。聖書は明白です。それぞれの道にどんなものが用意されているのかを明確に記しています。そして、ここにおられる子どもであっても中高生、大学生、青年、また年輩の方々でも、聖書が教えることは、必ず、私たちは今例外なくどちらかのグループに属しているということです。必ず、どちらかの終わりに向かって私たちは歩んでいると聖書は教えるのです。

私たちはこんなことばをよく聞いたりしませんか？「こんなことが起こるのだったら、私はこうしてたのに…」、「テストでこんな問題が出るのだったらそこを勉強していたのに…」、「健康診断でこんな結果が出るのだったら、もう少し食べ物を控えていたのに…、運動をしていたのに…」と。また、最近災害のニュースを良く聞きますが、その中では「こんな災害や台風が起こるのなら、もっと早くから準備していたのに…」と嘆く人々もいます。

私たちは何かが起こってから後悔するような者です。考えていただきたいことは、パウロはこの箇所です。私たちの人生の終わりには必ずこのようなものが待っていると、そのことを明白に教えているということです。あなたの今のその生き方の最後には必ずこのような結末が待っていると。ですから、どうかこれから聞くメッセージを自分のこととして考えてください。今、ある人は滅びへと向かっている訳です。そして、ある人は救いへと向かっています。そして、この問題は人生が終わる時に「ああ、あの時ああしておけば良かった」と、そう後悔しても遅いということです。ですから、私たちはみことばを見ていくに当たって、どうか、自分自身に問い続けてください。今私はどちらのグループに属しているのか？と。そのことを覚えた上で、今日のテキストであるピリピ3：17－4：1を読みましょう。

「3:17 兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。:18 というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。:19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。:20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。:21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。4:1 そういうわけですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。どうか、このように主にあってしっかりと立ってください。私の愛する人たち。」

皆さん、気づかれた方もおられるでしょう。17節には、パウロがピリピの人たちに与えた命令が記されています。その一つは「私を見ならう者になってください」です。なぜ、パウロはここでこのような勧めをする必要があったのでしょうか？前回見ましたが、3：15、16には「:15 ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてくださいませ。:16 それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。」と書かれていました。この流れを見た時に、パウロはキリストに似た者として歩んでいるから、あなたがたも私を倣うものとなって私と同じ考え方をしなさいと、すでにピリピの兄弟たちにこのように言ったのです。自分と同じようにただ目標を目指して一心に走っていきなさい、私と同じような考え方を持ちなさいと言ったわけですが。この励まし自体は複雑ではなく、むしろシンプルな励ましです。

では、なぜ、パウロは繰り返して同じようなことを言ったのでしょうか？なぜ、「私を見ならう者になってください」と命令したのでしょうか？もちろん、これには明確な理由があります。それはピリピの人たちがイエス・キリストの模範に倣って歩むときに、だれかの模範が必要だったからです。だから、そのことをよく知っていたパウロはこのような命令をしたのです。

ここには特に二つの理由が記されています。ピリピのクリスチャンたちは模範を必要とするような状況に置かれていたのです。二つの現実がこの人たちを取り巻いていたからです。そのことを今日は学んでいきたいと思えます。なぜ、パウロはそのような命令をしたのか？ピリピの人たちはどんな状況に置かれていたのか？なぜなら、それらを見ると私たちはパウロの時代とは違っても、同じ問題に直面しているからです。ですから、どうか、このメッセージを聞き、そして、学ぶときに、自分の信仰をもう一度吟味してください。そして、再びキリストが来られるその時を心から楽しみに待つという、そのような者へとともに成長していけることを祈っています。

#### ○パウロの命令：模範に倣うこと 17節

パウロがなぜそのような命令をする必要があったのかという、その理由を見る前に、まず、パウロの命令を簡単に見ていきたいと思えます。17節に「兄弟たち。私を見ならう者になってください。」とありますが、ここでパウロは自分のことを威張ってこのように言ったのではないことは明らかです。これまでに私たちが見て来たように、パウロはまだ自分自身が不完全であること、自分自身がまだゴールからかけ離れた存在であること、自分自身がまだゴールに向かって走り続けているその途中であることをよく知っていたのです。そして、自分自身がまだまだキリストを知ることに欠けていることを知っていたパウロは、自分自身もそのことを目指して歩み続けていたのです。ですから、パウロがここで「私を見ならう者になってください。」と言ったのは、自分自身のことを指して「見なさい。私は完璧です。だから私を真似しなさい。」と言ったのではないことは明らかです。

むしろ、パウロは自分自身がキリストの聖さを追い求めて生きている。他の人たちと同じように生きているその一員であったゆえに、クリスチャンたちを励ますためにこのような命令をしたのです。究極的に言えば、クリスチャンというのは皆同じ一つの目標を目標として歩んでいる者たちだからです。パウロはこのように言っています。Iコリント11：1「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。」と。パウロはキリストを模範として歩んでいる人物でした。パウロはキリストの足跡を辿って日々歩んでいたのです。だからこそ、他の兄弟たちを励ましてこのように言ったのです。「兄弟たち。私が今していることを注意深く見ていなさい。今自分がしていることはイエス・キリストを真似してやっていることだから。私はキリストに倣ってそのように生きているから、私自身のことを真似して生きていきなさい。」と。パウロという人物のその生き方を見た時に、パウロはいつもキリストに従うとはどういうことなのか？そのことを周りの人々に明らかにしてしていました。

しかし、パウロはここで自分自身だけを見ならいなさいとは言いませんでした。17節の後半には「また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」とあります。パウロだけでなく、テモテや2章に出て来るエパフロデトやまた教会のリーダーたちを指してこのように言ったのです。この人たちの歩みを模範にして目を留めるようにと言ったと考えられています。しかし、ここで皆さんに注意して欲しいのは、パウロは私たちと同じ教理を知っている人、同じ教理を信じている人に目を留めなさいとは言わずに「私たちを手本として歩んでいる人たちに目を留めなさい」と言ったことです。

ピリピの人たちが信仰の模範とすべき人は、どれだけ知識を多く持っているかではなく、どれだけその人がみことばに立って日々歩んでいるかです。みことばに立ってみことばに適應して生きている人を模範にするようにと、パウロはピリピの人たちを励ましたのです。パウロは霊的に正しい歩みをしている人のその模範に倣って生きるようにと命令をしました。そして、これは私たちひとり一人にも当てはめることができます。すでに見たように、私たちもキリストによって変えられ日々聖さを追い求めてい

く、キリストにより似た者になっていくという責任を与えられています。だから、私たちはみことばを学び、そして、キリストを覚えて歩んでいこうという思いを持って生きているのです。

でも、時に余りにも聖書の教えていることが難しく分からない、余りにもキリストの設ける基準が高すぎて自分にはこんなことはできない。自分の置かれているこの状況にあって、いったい神がみことばから何を言おうとしているのか分からないと、そのようなことを皆さん経験しないでしょうか？また、私たちがキリストのように歩んでいきたい、でも、その中で自分の心の中にある罪を見て、その罪ゆえにこうしたいけどそれができないと、自分の罪深さと神が求める基準のギャップに絶望感を覚えることがないでしょうか？パウロも私たちと同じ葛藤、苦悩を覚えていました。ローマ書7章にパウロの告白を見ることが出来ます。7：15と24をご覧ください。「:15 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」「:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」、パウロも私たちと同じように罪との葛藤を覚えて苦しんでいたのです。

しかし、パウロはいつも自分を罪の支配から解放してくださったそのキリストのすばらしさに、そのキリストに常に目を留め続けて、いつもこの主だけを覚えて歩み続けた人物だったのです。葛藤を経験しながらも、いつもよりキリストに似た者になりたい、より聖い者になっていきたいと願って、パウロは日々熱心に歩んでいたのです。パウロはそんな自分を指して、また、同じようにパウロを模範としている人たちを指して、「私たちの模範に倣いなさい」と言ったのです。

問題は私たちはどうか？です。自分に問い掛けてみてください。今、私たちはだれかを模範にしてクリスチャン生活を送っているのでしょうか？今、あなたの歩みの中にあつて、この人はキリストを愛してキリストに忠実に従っていこうと願って日々歩み続けている、この人のようになりたい、この人を私は模範にしていきたいと、そのような人があなたの生活の中にいるのでしょうか？また逆に、私たち自身が他のクリスチャン、兄弟姉妹に対して模範となるような行動を日々しているのでしょうか？聖書の知識を持っていることはもちろん大切です。ただし、問題は先程も見たように、そのみことばにその人がどれだけ基づいて生きているのか？そのことが問われているのです。私たちはパウロと同じように、自分自身を指して「確かに、私自身もまだまだ完全ではないけれども、私は主を愛してキリストに似た者になっていこうとしているから、私を倣うようになってください。」と、他の兄弟姉妹たちにそう言うことができるのでしょうか？

クリスチャン生活というのは、個人々々のものではありません。もちろん、個人的に祈りみことばを学びますが、私たちは一人では生きていけないのです。私たちはときに葛藤を覚え、ときに苦しみを抱きます。しかし、私たちの周りにいるその模範に倣うことができます。また、私たちの模範を隣の人に示していくことができます。そのように私たちは互いに助け合って生きていくことができます。いや、そのように助け合って生きていかなければいけないのです。模範というものが必要だとパウロはどのように命じているのです。今の私たちにも同じように必要です。それは教会のリーダーかもしれません。あるいは、信仰の先輩方かもしれません。皆さんはその人に倣って今歩んでいるのでしょうか？そして、倣って歩むだけでなく、私たちは他の兄弟たちの模範になっているのでしょうか？

私たちが覚えなければいけないことは、「私たちの目指す目標はただ一つだけ」ということです。キリストに似た者になっていきたいと、そのことを兄弟姉妹と助け合いながら私たちはやっていくことができるとパウロはどのように命じるのです。そして、その責任が私たちにはあるのです。

#### ☆パウロの命令が必要だった二つの理由 18-21節

さて、パウロがどのような命令をしたのかを見て来ましたが、18-21節をもう一度見てください。なぜ、パウロが模範に倣うようにと命令したのか？その理由を見ます。ここには二つのグループのことが記されています。

#### I. キリストの十字架の敵として歩む者の存在 18-19節

18節「というのは、私はしばしばあなたがたに言って来ましたが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。」、パウロはピリピの教会のことをよく知っていました。そして、兄弟姉妹の中に敵が紛れ込んでいることに気づいたのです。そして、その敵がもたらす脅威に気づき危惧していました。ここに「十字架の敵」とありますが、それはだれを指しているのかということに関しては、様々な考え方があります。ある人は3章の初めに出て来た、救いには律法や儀式を守り行う必要があると信じていたユダヤ主義者だと考えている人もいます。この人たちは、キリストの恵みによる救いを否定し「救い+行ない」を教えていました。また、ある人はこのユダヤ主義者たちと対局にあつて、恵みによって救われたゆえにもう全く律法を守る必要はないとそのように信じていた反律法主義者ではないかと考えている人もいます。この人たちは私たちはもう救われたのだから自分の好きなことをしていける、自分の欲望に従っていったいいの、聖さを追い求めてキリストに似た者へと

なっていくことなど必要ないと、クリスチャンとしての責任を否定しているような人たちでした。ですから、この人たちのことだと考えている人もいたのです。

皆さんに注目して欲しい点が二つあります。この箇所にある「多くの人々が」と「歩んでいる」ということばです。「歩んでいる」とは「クリスチャンの行ない、生き方」を表わすときにパウロが使っていたことばです。この18節にはショッキングなことが書かれています。「十字架の敵」として歩んでいる者とはどのような人たちなのか？それは、自分をクリスチャンだと告白している、クリスチャンだと信じている人だと言います。そして、その人たちが「多くの人々が」と多くいたと言うのです。パウロはこの人たちのことをよく知っていました。かつては、兄弟姉妹と呼んでいたそのような間柄だったのだろうと思われれます。なぜなら、パウロの「涙をもって言うのですが、」と言っていることばからそのように知ることができるからです。パウロはこの人たちのことを思ったときに涙を流さずにはいられなかったのです。それだけ彼らのことを気にかけていたのです。

明白なことは、この「十字架の敵」として歩む者は、イエス・キリストの福音を公に非難することはしないということです。イエスが自分の罪のために死んでくださったということを知っているだけではなく、それを受け入れている人です。この人たちはことばでは「イエスは救い主だ、主だ」と認めているのですが、彼らの生き方がそれを否定していたのです。彼らの生き方が救われているその実にふさわしい歩みをしていなかったと、そのことを18節でパウロは教えているのです。

皆さんがよく知っておられるイエスのことばを思い出してください。マタイの福音書7：13-14、21「：13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。：14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」「：21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」、ここでイエスが言わんとしたことは明白です。多くの人が大きな門から入り滅びへと向かっていると、『主よ、主よ』と言って何か形式的なことをすれば救われるのではない、主のみこころを行う者だけが天の御国に入ることができると言っています。残念ながら、ある人たちは狭い門から入りさえすれば、後は自分の好きなようにしていくことができると考えたりします。救われたらもう自分の好きなことをしているのだ、神が何を言うかではなく自分がしたいことをすればいいのだと、そのように考えている人もいます。残念ながら、このピリピの教会の中にはそのような人たちが多くいた、そのような敵が数多く紛れ込んでいたと言うのです。

キリストの十字架に適する者、この恵みに敵対する者が多くいたとパウロはここで言うのです。それだけでなく、この人たち対してその四つの特徴を19節で説明しています。

### ●キリストの十字架の敵の四つの特徴

19節「彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」

#### 1. 彼らの最後は滅び 19 a 節

パウロは「彼らは今滅びに向かっている」と言います。この人たちは口で言っていることと違って、心からの悔い改めをすることをしないで、自分自身を否定してすべてをささげてキリストについて行くべきであるにも関わらず、自分を否定せず主のために犠牲を払おうとはしないのです。広い道を歩み続けて、そして、キリストの成された十字架の恵みに対して今も敵対して歩んでいるのです。そして、その結果、一步一步永遠の滅びへと向かっていると言います。

#### 2. 彼らの神は彼らの欲望 19 b 節

彼らは真の神を心から礼拝しようとしません。まさに、パウロがローマ書で言った通りの人物です。ローマ16：18「そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。」、キリストの敵として歩む者は、神が望まれることよりも自分の望むままを行うような者だったのです。キリストを信じていると言いながら、その生き方は自分の欲を満たす生き方そのものだったとパウロは言います。

#### 3. 彼らの栄光は彼ら自身の恥 19 c 節

クリスチャンとは「キリストだけを誇りとして生きていく者」です。ガラテヤ6：14に「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。…」と書かれている通りです。この「十字架の敵」は、口では「キリストを誇りにしている」言いながら、その生き方は神以外のものに誇りを置いていました。キリストの栄光よりも自分自身を誇ろうとしていたのです。だから、その結果、自分に恥を招くと言います。

#### 4. 彼らの思いは地上のことだけ 19 d 節

この特徴こそ彼らの特徴をシンプルに表しています。ヤコブ4：4をご覧ください。「貞操のない人た

ち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は

自分を神の敵としているのです。」、キリストの十字架の敵、この人たちは口ではキリストを追い求めていると言っていました、彼らの生き方がキリストではなくこの世のものを愛し、自分を愛し、この世に属した生き方だったのです。彼らは自分自身について「自分は救われている」と思っていたのです。しかし、彼らの生き方がそうではないことを明らかにしていたと言うのです。

ピリピ教会のクリスチャンたちは、このような人たちの存在に向き合わなければいけなかったのです。そして、今の時代を生きる私たちも同じような問題を抱えています。

これまでパウロの生き方を見て来ました。イエスの弟子として歩むこと、イエスの本当の弟子として歩むこと、それはキリストのためにすべてを犠牲にする生き方だったのです。キリストのすばらしさを知ったゆえに、自分がかつて持っていたすべてのものを捨ててもこのキリストだけを追い求めたい、キリストだけを知りたいと、そのような者へ変えられたのです。それが真の信仰者の姿です。今まで見て来たように、パウロという人物の生き様を見た時に、苦しみや困難を多く経験していました。キリストを知りたい、キリストに似た者になりたいと歩むゆえに多くの迫害を受けていたのです。ある人たちはこのことを聞くと、クリスチャンになることはこの世にある幸せを逃してしまうと考えます。この世の中にはたくさんの満足や喜びがあって、キリストにすべてをささげていく生き方が、そのような幸せを得る機会を失ってしまう、その機会を捨ててしまうかのように考えてしまうのです。本当にそうでしょうか？

この世の中に「本当の幸せ」は存在しているのでしょうか？確かに、私たちを一時的に喜ばせたり、一時的に満足を与えるものはたくさんあります。しかし、本当に私たちの心を喜ばせるもの、本当の満足をもたらすことができるものはこの世には存在していないのです。だからこそ、私たちの周りを見渡したときに、みな、それぞれがそれぞれの幸せを求めているのです。生きる目的が何なのか？と各々考えて生きているのです。何を手に入れたら私は幸せになるのか？何を手に入れたら私は満足を抱くことができるのか？と、そのようにして人々は歩んでいる訳です。

私たちが覚えなければいけないのは、本当の満足を与えることができるのはキリストだけだということです。本当の喜びを与えることができるのはキリストのみです。だから、私たちは「キリストの十字架によって与えられた救いを得た私は、もうそれだけで十分だ。確かに、いろいろなことがあるけれど、私にはたった一つ、キリストを知っている、そのすばらしさだけで十分だ。それだけが本当の満足を私に与えるのだから。」と言います。

問題は、私たちがそのように生きているかどうかです。「私たちはキリストを得た」とそう言いながら、私たちの心はこの世のものにまだ目を向けていないでしょうか？私たちはまだ自分の欲を満たすことをいつも考えていないでしょうか？「キリストを誇りする」と言いながら、あなたは本当にキリストを誇りにした生き方をしているでしょうか？「世を愛するな」と言いながら、私たちは世を愛していないでしょうか？キリストのすばらしさを知ったそのことだけに私たちは満足を置いて歩んでいるでしょうか？少し自分自身に問い掛けてみてください。キリストを知る以前、あなたが追い求めていたものはいったい何だったのでしょうか？そして、キリストを知った後、今なお、あなたはのかつて持っていたものを引き継いでいないでしょうか？今なお、かつての自分の生き方をしていないでしょうか？聖書が教えることは、私たちがキリストによって救われたとき、古いものは過ぎ去り新しいものになったということです。私たちがかつての生き方を今していないでしょうか？

ピリピの教会の中には、口では「自分はクリスチャンだ」という人がたくさんいましたが、その生き方がそれを否定していたゆえに彼らは滅びに向かっているとパウロは警告し、このような命令を与えたのです。私たちは今どのような歩みをしているでしょうか？私たちは滅びへと向かうような歩みをしていないでしょうか？もし、私たちがキリストを求めることよりも、自分のやりたいことを追い求めているなら、聖書が言うのは「今あなたは滅びへと向かっている」ということです。

どうか今日、このキリストのすばらしさを知ってそれを追い求めていく者になってください。確かに、この世の中に生きていれば、私たちは周りの人から「自分の望むことをすればいいのではないか？」と語りかけて来るかもしれませんが、キリスト以外にあなたも満足があるかのように惑わして来るものはたくさんあります。でも、私たちがだまされてはいけません。聖書はキリストにのみ本当の満足があるのだ、キリストにのみ本当の喜びがあるのだと告げるからです。パウロはそのことを知識で知っただけでなく、生き方をもって明らかにしていたのです。私たちがそのような生き方をしていくその責任があります。

## Ⅱ. 天に国籍を持つ者の存在 20-21節

パウロの命令が必要だった二つ目の理由、もう一つのグループとして「天に国籍を持つ者」が存在していたからだと言います。20節を見てください。そのように書かれています。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」、パウロは先に見た「十字架の敵」と対比して、「私たちの国籍は天にあるのだ」とピリピの人たちに語りかけたのです。大切なことは、パウロはここで「私たちの国籍は天にあるでしょう」と未来のことを言ったのでもなく、不確定なことを言ったのでもないということです。あなたがたはもうすでに天に国籍を持つ者とされていると、その事実を彼らに伝えたのです。この事実から二つの大切な真理が教えられています。

## ○二つの大切な真理

### 1. 天に国籍をすでに持っているという事実は、私たちの目を天のことにのみに向けさせる

言い換えるなら、天に国籍を置く者は地上のことに捉われることはないということです。皆さんもよくご存じの箇所、マタイ6：19-21には「19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。21 あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」とあります。兄弟姉妹の皆さん、もし、私たちがキリストによって救われているのなら、私たちの名前はすでに天に刻まれているのです。私たちの資産もすでに天に蓄えられている、私たちの報いはすでに天に用意されている、私たちはもうすでに天国民としてそのメンバーに加えられている、そこでは救い主イエス・キリストが私たちのことを待ってくださっているということです。そのことを私たちはこのみことばから見ることができます。天に国籍を置く者は地上のことに捉われるような者ではありません。

問題は、私たちはどこに心を向けているのでしょうか？確かに、私たちはこの地上に生きている者です。しかし、心の目は常に天のことに向いて生きているのです。それこそが天に国籍を持つ者の生き方だと、まずパウロは言います。

### 2. 天に国籍をすでに持っているという事実は、私たちの今の歩みに希望を与える

20節の後半から21節には「…そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」とパウロは続けています。真のクリスチャンは主イエスが再び帰って来られることを、その日を心待ちにしながら忍耐をもって生きる者です。

皆さん、主は必ず帰って来られるのです。ある人は「どうしてそんなことが分かるのですか？」と言うかもしれませんが、それはキリストが初めにこの世に来られた様子を見ればわかります。

・主はダビデの子孫として生まれる＝イザヤ9：6-7「6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれ

る。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」

・ベツレヘムに生まれる＝ミカ5：2「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいも

のだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、

永遠の昔からの定めである。」

・処女のもとに生まれる＝イザヤ7：14「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられ

る。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」

・痛みを受け、苦しみ、十字架に架けられる＝イザヤ53：1-12「1 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。【主】の御腕は、だれに現れたのか。2 彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらした。彼の打ち傷によって、私たちがいやされた。6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だ

れが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。：9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。：10 しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。：11 彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになる。：12 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たち

を分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。」

このように約束されていました。そして、キリストは1回目に来られたときにその務めのすべてを成し遂げられたのです。世界の初めからずっと主はご自分について言われていたことをして来られたのです。そして、この聖書が同じようにこのように言うのです。「わたしは必ず帰って来る」と。

私たちはたとえどんな困難があったとしても、どんな試練があったとしても、どんな状況にあったとしても、必ず、喜びを見出すことができます。なぜか？それはキリストが必ず帰って来られるから、そして、帰って来られるキリストが私たちを新しい者へと変えてくださるという約束を私たちが受けているからです。今、私たちが持っているこのからだ、それは弱さを覚え、病いに苦しみ、悲しみを覚え、絶望を味わい、苦しんだり恐れを抱いたり、死の恐怖を抱いたり、そして、罪に支配されている訳です。それゆえ、私たちはこうして生きていながら多くの苦しみを味わったり、病いと戦いを経たり、多くのことで涙を流したり、絶望や罪の葛藤を覚えたり、そして、ときに余りの試練や苦しみのゆえに希望や喜びを失ってしまうという弱い者です。

しかし、キリストが再び帰って来られるときに、この私たちのからだはキリストの持つ栄光のからだへと変えられるのです。Iヨハネ3：2「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」、キリストが帰って来られるとき、私たちはキリストに似た者へと変えられる。そのとき私たちが今苦しんでいる困難や苦しみからも解放されるのです。そして、この世の何ものをもっても表現できない喜びを心に与えられ、いつまでも主との交わりを楽しむことができます。これこそが今の私たちが持っている希望だと言うのです。

そして、もし、その希望を私たちが持っているのであれば、私たちの責任は日々信仰の模範に倣って、キリストに似た者へと変わり続けることです。コロサイ3：1-2をご覧ください。「：1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。：2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」、パウロ

口がどんな時にもキリストだけに目を向けて天を見て歩み続けたように、私たちも今同じように歩いていく責任があるのです。

確かに、ピリピ教会の人たちも経験したように、私たちが生きていながら、この世の幸せのほうがすばらしいと、本当の福音から離れるような誘惑を度々経験するわけです。いろんな難しい困難や試練を経験します。また、この世の中を見たときに、いろんなすばらしい物が溢れていることも私たちは目にします。それが私たちの心を揺るがすことがあるかもしれません。しかし、私たちはキリストのすばらしさを知っているゆえに、日々天に目を向けて忠実に歩み続けていくのです。たとえ、今どんな苦しみに遭っているとしても、どんなことを経験していたとしても、必ず帰って来られるキリストが私たちひとり一人に用意してくださっているその報いは大きいのです。その希望を私たちはキリストにあって持つことができます。

#### ○まとめ 4：1

そして、最後にパウロは4：1でこのように言いました。「そういうわけですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。どうか、このように主にあってしっかりと立ってください。私の愛する人たち。」と。パウロはピリピの兄弟たちを励ましたのです。主にあってしっかりと立つようにと。同じことが今私たちにも言われているのです。「主にあってしっかりと立つように」と。キリストのすばらしさを知って私たちは変えられたのです。キリストによって新しい目標を持って歩む者へと変えられたのです。その変えられて新しく与えられた希望を常に持って、忠実に歩み続けていくその責任があるということを見て来ました。

キリストにあるその生活、人生だけが私たちに本当の満足をもたらしてくれるということ、いつも私たちは罪との戦いを経験します。ときに絶望することがあるかもしれません。また、私たちのからだは弱く多くの人々が病いに苦しんでいます。しかし、キリストは必ず帰って来られ、大いなる御手をもって

力をもって私たちを変えてくださるのです。この希望は決して揺るぐことはないのです。問題は、私たちひとり一人はどちらの終着駅に向かって今歩んでいるか？ということです。今、あなたの歩んでいるその道は滅びへと繋がる道でしょうか？それとも、このキリストのすばらしさにあつて持つことのできる希望を抱いて歩むそのような道でしょうか？そのことを私たちはよく考えなければいけないのです。

どうか、このキリストのすばらしさをもう一度考え直してください。どうか、この世ではなく天に目を向けて、そして、このキリストの救いにあるすばらしさを味わい楽しみながら、兄弟姉妹と助け合いながら、いつか必ず帰って来られる王であるキリストを、喜びをもって楽しみにしながら私たちは歩んでいくことが必要なのです。そして、そのことが私たちにはできるということです。どうか、キリストのすばらしさを知ったその人生を最後まで歩んでいきましょう。